

# 副詞マシテとナオサラの分析

安部 朋世

千葉大学教育学部

## A Semantic Analysis of 'Mashite' and 'Naosara'

ABE Tomoyo

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本稿は、副詞に分類される現代語のマシテとナオサラの共通点と相違点について明らかにするものである。まず、「AマシテB」における先行研究の指摘を確認した上で、「AマシテB」のAとBとの関係に「対比」と「累加」があることを指摘した。その上で、マシテとナオサラの共通点として、〈①ナオサラは、マシテと同様、AとBを共通項Cとの関係において想定していることを表す〉〈②AとBとの関係は、〈AよりもBの方が共通項Cという条件を満たし易い〉ものとして想定される〉〈③AとBとの関係には、「対比」と「累加」の二種類がある〉の3点を挙げた。相違点としては、〈マシテ文「AはCマシテBはC」とナオサラ文「AはC BはナオサラC」の違いは、〈要素であるABCの中でどの部分が言いたいことであるか〉にある〉ことを明らかにした。

キーワード：マシテ (*mashite*)、ナオサラ (*naosara*)、副詞 (*adverb*)、とりたて詞 (*focus particle*)

### 1. はじめに

本稿は、副詞に分類される現代語のマシテとナオサラについて、その共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

本稿で取り上げるマシテの用法は、(1)(2)のようなマシテ・マシテヤの用例である。マシテ・マシテヤを一括して扱い、「何にもまして」等の連語的用法については取り上げないこととする。

(1) 猫は犬のように大喰いではないし、マシテ仔猫だからと加恵は安心をしたが、この生れたばかりで力なげに泣いている仔猫の世話は、於勝たちだけでしきれものかどうかと思った。この仔猫は六匹とも私ひとり立派に育てあげてみせようと加恵は心で誓った\*1。  
(華岡)

(2) 親の掛け合わせで遺伝子が決まりますし、親が作り出す環境によって性格は決まってしまうものでしょう。兄弟や双子でさえ、顔も声も、そして性格も異なります。マシテヤ他人なら性格は十人十色なのです。  
(毎日 2009)

また、ナオサラについては、ナオサラ・ナオノコトを一括して扱う。

(3) 詩でも、転がもつともむずかしい。人の一生では、ナオサラむずかしい。  
(国盗り)

(4) 「あー残念」。ラジオから離れようとしたが、様子がおかしい。東映の選手がベンチに戻るのを尻目に、満塁の走者が次々とダイヤモンドを回っているという。アナウンサーも混乱しているようで、要領を得ない。小学生だった私にはナオノコト、何が何やらわからない。  
(毎日 2009)

### 2. マシテについて

#### 2.1 先行研究についての検討

マシテについての先行研究は、「AマシテB」のマシテが、概ね「Aとの関係においてBを取り上げる」ものであると捉える点が共通する。そして、AとBとの関係については、「あなた」(筆者注：A)と比較してもっと著しい「わたし」(筆者注：B)を取り上げる立場(市川 1976：238)、「対象に対する軽重の価値評価性」(工藤 1977：978)、「ある状況において、著しいほうの例をあげて“それですらある状態となるのだから、他方の場合は言うまでもない”と、軽いほうの例が当然そうなることを強調する」(森田 1989：1059)、「前件に程度の低いものを掲げ、後件に程度のはなはだしいものが言うまでもなく成り立つことを誇張の暗示を伴って述べる」(飛田・浅田 1994：490)、「XとXより程度の高いYを比べて」(グループ・ジャマシイ 1998：539)のように、いずれも「程度の著しさ・高低・軽重」として捉えていることが挙げられる。

しかし、この「程度の著しさ・高低・軽重」とは具体的にどのようなことを指すのかが曖昧である。次の例文は、いずれも先行研究に挙げられる例であるが、(5)では「先生」が「軽/低」で「生徒」が「重/高」であり、(6)では「子供」が「軽/低」で「大人」が「重/高」というのは、どのような基準で言えるのか、先行研究の説明では分かりにくいと思われる。

(5) 先生でさえわからないのに、マシテ生徒のぼくにできるはずはない。  
(森田 1989：1059)

(6) 子供でさえやれるのに、マシテ大人のお前にできないことがあるものか。  
(森田 1989：1059)

一方、安部 2008では、上記の課題について、マシテを次のように記述する。

(7) マシテの意味

連絡先著者：安部朋世

「AマシテB」において、マシテは、AとBを共通項Cとの関係において想定していることを表す。具体的には、

①マシテの前項の内容Aと、マシテの後項の内容B、そして、双方に共通する内容である共通項Cの3項は、それぞれ文脈から想定される。

②AとBとの関係は、〈AよりもBの方が共通項Cという条件を満たし易い〉ものとして想定される。

(安部 2008 (45))

この記述の「共通項C」という捉え方は、以下の議論においても重要であるので、詳しく確認しておきたい。

まず、「AとBを共通項Cとの関係において想定している」とは、例えば、

(8) 内供はこう云う人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらぬ。マシテ柑子色の帽子や、椎鈍の法衣などは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、唯、鼻を見た。(鼻)

の例文のように、

(9) A [紺ノ水干ヤ白ノ帷子ハ]  
C [眼に入ラナイ] マシテ  
B [柑子色ノ帽子ヤ椎鈍ノ法衣ハ]  
C [無イト同ジダ]

すなわち、

(10) 「AはCマシテBはC」

という文型が基本的であるということである。

しかし、すべてのマシテ文が「AはCマシテBはC」という形になっているわけではない。共通項Cの一方が明示されない例文や、両方とも明示されず、文中からCが想定される例もある。(11)は両方のCが明示されない例文である。

(11) 左馬の頭がいうあいだ、源氏は心の中で、ただひとりの女を想いつづけている。あのお方こそは、足らぬ点もなく、マシテ才気をひけらかすということなど、露ほどもなさらぬ。たおやかでいらして、お心ばえが素直で……やさしくて、それでいてきりッとした気高いところがおありで……と、それからそれへと考えつづけると、源氏は胸が苦しみでふさがるのであった。(新源氏)

(12) A [足ラナイ点ガナイコトハ]  
(C [アノ方ノ素晴ラシサダ]) マシテ  
B [才気ヲヒケラカサナイコトハ]  
(C [アノ方ノ素晴ラシサダ])

また、Aが文中に明示されておらず、文脈から想定される場合もあることから、「①マシテの前項の内容Aと、マシテの後項の内容B、そして、双方に共通する内容である共通項Cの3項は、それぞれ文脈から想定される。」とされている。

「②AとBとの関係は、〈AよりもBの方が共通項Cという条件を満たし易い〉ものとして想定される。」は、次の通りである。先に挙げた(8)は以下のような関係の文だと考えられる。

(13) A [紺ノ水干ヤ白ノ帷子ハ]

C [眼に入ラナイ] マシテ

B [柑子色ノ帽子ヤ椎鈍ノ法衣ハ]

C [無イト同ジダ] ((9)の再掲)

このAとBはともに、共通項C「目ニ入ラナイ」ものとして捉えられており、その度合いは、Bについて「見慣れている」とあるように、AよりもBの方が「ヨリ“目ニ入ラナイ”モノ」として、つまり、共通項C「目ニ入ラナイ」を満たすものとして相対的に「満たし易いもの」と位置付けられている。それを図示すると次のようになる。

(14) (満タシ難イ) C [目ニ入ラナイ] 条件 (満タシ易イ)  
A [紺ノ水干ヤ白ノ帷子] ←→ B [柑子色ノ帽子ヤ椎鈍ノ法衣]

以上が、安部 2008で示されるマシテの特徴である。

## 2.2 AとBとの関係—「対比」と「累加」—

2.1では、マシテについての先行研究を検討し、マシテでは「AとB」が「共通項Cとの関係」で捉えられることを確認した。それを踏まえ、2.2では、「AとBとの関係」について、「対比」と「累加」の二種類が挙げられることを指摘する。

まず、「対比」については、例えば上記(8)が挙げられる。(8)におけるAとBは、「紺ノ水干ヤ白ノ帷子」と「柑子色ノ帽子ヤ椎鈍ノ法衣」のように全く別のものであり、「見慣れているか否か」という観点から、「眼に入らない度合い=C」について、「AよりもBの方が見慣れている、より〈眼に入らない〉ものである」と位置付けられている。つまり、全く別のものであるAとBが、共通項Cとの関係において、「AよりもBの方がCを成立させ易い」と位置付けられているといえる。このようなAとBの関係を仮に「対比」と呼ぶことにする。

一方、次の例文(15)は、AとBとが「全く別のもの」ではない例である。

(15) 押入の中から木綿の単衣を出すと、加恵は音を立てて布を裂いた。雲平の仕事を手伝うのに着物の一枚ぐらい潰しても惜しいとは思えない。マシテ於継でなく加恵が直接頼まれた仕事なのだ。(華岡)

この(15)は、(16)のような関係の文だと考えられる。

(16) A [雲平ノ仕事ヲ手伝ウナラバ]  
C [自分ノ着物ヲ潰シテモ惜シクナイ] マシテ  
B [(加えて) 直接頼マレタ仕事デアレバ]  
C [自分ノ着物ヲ潰シテモ惜シクナイ]

このときのAとBの関係は、「A=雲平ノ仕事ヲ手伝ウ」「B=〈A=雲平ノ仕事ヲ手伝ウ〉+〈ソノ仕事ハ雲平ニ直接頼マレタモノデアル〉」のように、「BはAに条件を加えたもの」という関係になっている。そして、この「BはAに条件を加えたものである」ことによって、「AよりもBの方がCを満たし易い」ものと位置付けられていると考えられる。このようなAとBの関係を仮に「累加」と呼ぶことにする。

以上、マシテにおけるAとBとの関係に、「対比」と「累加」の二種類があることを指摘した。

## 3. マシテとナオサラの共通点と相違点

本節では、前節の内容を踏まえ、マシテとナオサラの共通点と相違点について考察する。

## 3.1 マシテとナオサラの共通点

マシテとナオサラの共通点としてまず挙げられるのは、ナオサラにおいても、AとBが「共通項C」との関係において捉えられることである。次の例は、「AはC BはナオサラC」という形の文の例である。

(17) 詩でも、転がもつともむずかしい。人の一生では、ナオサラむずかしい。(国盗り) ((3)の再掲)

(18) A [詩デハ]

C [転ガモットモムズカシイ]

B [人ノ一生デハ] ナオサラ

C [転ガモットモムズカシイ]

次の例のように、「AはC Bはナオサラダ」の形で、「BはC」のCが明示されない場合もある。

(19) 時代劇から“新説”“珍説”を紹介するものまで、歴史をテーマにした番組は多彩で、根強い人気を集めている。だが番組が話題になればなるほど制作者は娯楽性と史実のはざままで苦悩する。“公共放送”となるとナオサラのようだ。(毎日 2009)

(20) A [話題ノ番組デアレバ]

C [娯楽性ト史実ノハザマデ苦悩スル]

B [(加えて) 公共放送デアレバ] ナオサラ

(C [娯楽性ト史実ノハザマデ苦悩スル])

また、AとBとは、「AよりBの方が共通項Cを成立させ易い」という関係にある点も共通点として挙げられる。(17)(19)のAとBは、それぞれ(21)(22)のような関係になっていると考えられる。

(21) (満タシ難イ) C [転ガモットモムズカシイ] 条件 (満タシ易イ)

A [詩] ←————→ B [人ノ一生]

(22) (満タシ難イ) C [娯楽性ト史実ノハザマデ苦悩スル] 条件 (満タシ易イ)

A [話題ノ番組] ←————→ B [公共放送]

さらに、ナオサラにもマシテと同様に「対比」と「累加」の二種類があることも、共通点として挙げられる。まず、「累加」の例を示す。次の(23)(25)を見られたい。

(23) 時代劇から“新説”“珍説”を紹介するものまで、歴史をテーマにした番組は多彩で、根強い人気を集めている。だが番組が話題になればなるほど制作者は娯楽性と史実のはざままで苦悩する。“公共放送”となるとナオサラのようだ。(毎日 2009) ((19)の再掲)

(24) A [話題ノ番組デアレバ]

C [娯楽性ト史実ノハザマデ苦悩スル]

B [(加えて) 公共放送デアレバ] ナオサラ

(C [娯楽性ト史実ノハザマデ苦悩スル])

= 「A = 話題ノ番組」「B = 話題ノ番組 + 公共放送」という関係であり、Bの方がより「娯楽性ト史実ノハザマデ苦悩スル」と捉えられる。

(25) 最後にととう谿が姿をあらわした。(略) 日は谿向うの尾根へ沈んだところであった。水を打ったような静けさがいまこの谿を領していた。何も動かず何も

聴こえないのである。この静けさはひょっと夢かと思うような谿の眺めにナオサラ夢のような感じを与えていた。(冬)

(26) A [谿ノ眺メハ]

C [夢ノヨウナ感ジダ]

B [(加えて) 静ケサハ] ナオサラ

C [夢ノヨウナ感ジダ]

= 「A = 谿ノ眺メ」「B = 谿ノ眺メ + 静ケサ」という関係であり、Bの方がより「夢ノヨウナ感ジダ」と捉えられる。

一方、(27)(29)はいずれも、AとBが「全く別のもの」であり、それが「共通項C」との関係で捉えられる、「対比」の関係にあるといえる。

(27) 宮島さんは00年、脳梗塞(こうそく)で祖母を亡くした。5年間の闘病生活の末だった。「あのつらい状態がなくなればいいと思ったが、幼い子供たちであればナオサラだ」。原画を制作しながら、約10年前の祖母の記憶がよみがえったという。(毎日 2009)

(28) A [母ニツイテハ]

C [アノツライ状態ガナクナレバイ]

B [幼イ子供タチニツイテハ] ナオサラ

(C [アノツライ状態ガナクナレバイ])

= 「母」と「幼イ子供タチ」は全く別のものであり、より「アノツライ状態ガナクナレバイ」のは「幼イ子供タチ」である。

(29) 詩でも、転がもつともむずかしい。人の一生では、ナオサラむずかしい。(国盗り) ((3)(17)の再掲)

(30) A [詩デハ]

C [転ガモットモムズカシイ]

B [人ノ一生デハ] ナオサラ

C [転ガモットモムズカシイ]

= 「詩」と「人ノ人生」は全く別のものであり、より「転ガモットモムズカシイ」のは「人ノ人生」である。

以上、マシテとナオサラの共通点として、〈ナオサラは、マシテと同様、AとBを共通項Cとの関係において想定していることを表す〉〈AとBとの関係は、〈AよりもBの方が共通項Cという条件を満たし易い〉ものとして想定される〉〈AとBとの関係には、「対比」と「累加」の二種類がある\*2)〉の3点を指摘した。

## 3.2 マシテとナオサラの相違点

3.2では、マシテとナオサラの違いについて検討する。飛田・浅田 1994には、以下の指摘が見られる。

(31) 飛田・浅田 1994

a) 「「なおさら」は後件の程度が前件より高いことを述べるだけで、後件の程度のはなはだしさを述べるために前件を持ち出す暗示はない。」(p. 490)

(32) この部屋は西日が当たって暑い。マシテ夏はとてもたまらない。(飛田・浅田 1994: 490「まして」①)

(33) ×この部屋は西日が当たって暑い。ナオサラ夏はとてもたまらない。(飛田・浅田 1994: 490)

確かに、(33)の例文は許容度が下がるように感じられる。しかし、(33)の許容度が下がるのは、例文の意味ではなく、ナオサラの位置や他の副詞との共起関係に因るものと考えられる。(34)次のように、ナオサラの位置をかえ、「と

ても」という副詞との連続を避ける形で「とてまたまらない」を同様の意味にとれる表現にかえると、文の許容度が上がる。

(34) この部屋は西日が当たって暑い。夏はナオサラ暑さがこたえる／たまらない。

森田 1989においても、「[まして／いわんや]は、(略) [ましてBは……]「いわんやBにおいては……」とBに係る。「なオサラ」は“AだけでなくBなのだから、なオサラ……だ”と述語に係る。」(pp. 1059-1060)のように、係り方についての指摘があることから、マシテとナオサラの比較においては、単にマシテとナオサラを置き換えるだけでなく、それらの文中での位置にも留意する必要があると考えられる。飛田・浅田 1994の「(ナオサラは)後件の程度のはなはだしさを述べるために前件を持ち出す暗示はない」という指摘については、根拠とする例文の妥当性に疑問があること、また、ナオサラの位置を妥当な位置に置き換えればマシテとの置き換えが可能であることから、妥当ではないといえるだろう。

では、マシテとナオサラの違いはどこにあるのだろうか。

(35) X：今回の試験、彼は無理だろうね。

Y：今回は試験内容が変更になったよね。マシテ、本番では何が起るか分からないよ。

(36) X：今回の試験、彼は無理だろうね。

Y：？今回は試験内容が変更になったよね。本番では何が起るか分からないからナオサラだよ。

(35)(36)はいずれも、「彼は試験に受からないだろう」という予想に対して、根拠を示すことで「受かるかもしれない」と反論する内容の文であるが、マシテ文の(35)に比べて、ナオサラ文の(36)は、ナオサラの内容が分かりにくく、やや許容度が下がるように感じられる。許容度にこのような差が生ずるのはなぜであろうか。

反対の意見を主張する場合は、主張とともにその根拠を示すことで説得力を増すことになるが、(35)は「AマシテB」という形の文であり、「共通項C」すなわち「受かるかもしれない」という主張が明示されていない。しかし、「AマシテB」とマシテがABの間に位置することによって、(35)が、〈共通項Cを有し、Cによって「A = 今回は試験内容が変更になった」と「B = 本番では何が起るか分からない」が関係づけられる文である〉と解釈されるようになる。すなわち、「受かるかもしれない」を主張とし、その根拠として〈「A = 今回は試験内容が変更になった」]、加えて「B = 本番では何が起るか分からない」〉があると解釈できるのだと考えられる。

それに対し、(36)は、「A。Bだからナオサラだ」という文型であり、「A。B」の段階では、AとBが並立の関係で提示されているに過ぎない文となっている。さらに、共通項Cが明示されておらず、「ナオサラだ」という表現まで来てはじめて共通項の内容を文脈から想定することになるため、どのような主張なのか、A、Bが主張に対する根拠であるのかが分かりにくい文となってしまっていることが、許容度を下げる原因であると考えられよう。

以上のことから考えると、マシテ文「AはCマシテBはC」とナオサラ文「AはC BはナオサラC」の違い

は、〈要素であるABCの中でどの部分が言いたいことであるか〉の違いであるといえるのではないだろうか。(35)と(36)で許容度に差が生じたのも、「受かるかもしれない」と反論する内容で、かつ、その主張(共通項C)を明示しない文において、マシテ文の(35)の方が、反論の根拠を示す文、すなわち〈A、Bが言いたいことである〉と解釈され易いからだと考えられるだろう。

次の(37)(39)はいずれもナオサラ文であるが、(37)は、後続文脈が「ムダ」についての話であること、また「BはC」のBが「ダム」の反対が「ムダ」というのも、といった付け加えの内容であることから、「AはC」が「言いたいこと」であると考えられるのに対し、(39)は、後続文脈にBと関係する「(日米)両国のFTAは」とあることから、「BはC」が「言いたいこと」であると考えられる。

(37) ところで昨今のキーワードは「ムダ」である。「ダム」の反対が「ムダ」というのも、時の言葉としてナオサラクローズアップされることになったのだろう。新政権の言う「ムダ」は、すなわち税金のムダづかいを指すわけだから、ムダ排除の政策自体に異論はない。(毎日 2009)

(38) A [「ムダ」ハ]

C [キーワードトシテ注目サレテイル]

B [「ダム」ノ反対ガ「ムダ」トイウコトカラモ] ナオサラ

C [キーワードトシテ注目サレテイル]

(39) EPAやFTAは締結国間の関税など貿易障壁を撤廃する枠組みであり、差別的な政策の排除を目指す世界貿易機関(WTO)体制をゆがめる危険性は確かにある。世界1位、2位の経済大国である日米であればナオサラだ。だからこそ両国のFTAには広範な自由化に踏み込む責任がある。その成果をWTOに反映させることで、世界経済全体の自由貿易にも貢献できるはずだ。(毎日 2009)

(40) A [EPAやFTAハ]

C [WTO体制ヲユガメル危険性ガアル]

B [日米間ノモノデアレバ] ナオサラ

(C [WTO体制ヲユガメル危険性ガアル])

以上のように、ナオサラ文では、文脈によって「AはC」「BはC」のいずれも「言いたいこと」に解釈され得ると考えられる。

これに対し、マシテ文については、先に、(35)の分析から〈A、Bが言いたいことである〉と述べたが、「AハC」が言いたいことだと考えられる(37)のナオサラをマシテに置き換えると、(41)のように許容度が下がることから、A、Bのうち、〈特にBが言いたいことである〉と捉えられそうである。

(41)??ところで昨今のキーワードは「ムダ」である。マシテ、「ダム」の反対が「ムダ」というのも、時の言葉としてクローズアップされることになったのだろう。新政権の言う「ムダ」は、すなわち税金のムダづかいを指すわけだから、ムダ排除の政策自体に異論はない。次の文は「A (=「芸術」)マシテB (=「新人」)はC (=「過酷な環境ニアル」)」の形であるが、後続文脈で「新人」について述べられていることから、同様に〈B

がより言いたいことである」と考えられよう。

- (42) 奨励賞の設置によって、顕彰できる人が増え、とてもありがたい。経済状況が厳しくなると、芸術、マシテや新人は過酷な環境に追い込まれてしまいがちです。この賞が少しでも絵画を志す若い人たちの励みになれば、と願っています。私は資金を提供するだけで、選考には一切タッチしません。3人の選考委員の方々にすべてをお任せしています。贈呈式で受賞者2人と握手するのを楽しみにしています。(毎日 2009)
- 以上、マシテとナオサラの違いは、〈要素であるABCの中でどの部分が言いたいことであるか〉にあるものと考えられることを指摘した。

#### 4. おわりに

本稿では、マシテとナオサラの共通点と相違点について分析を行った。両者の共通点と相違点は以下の通りである。

- (43) マシテとナオサラの共通点
- ①ナオサラは、マシテと同様、AとBを共通項Cとの関係において想定していることを表す。
  - ②AとBとの関係は、〈AよりもBの方が共通項Cという条件を満たし易い〉ものとして想定される。
  - ③AとBとの関係には、「対比」と「累加」の二種類がある。
- (44) マシテとナオサラの相違点
- マシテ文「AはCマシテBはC」とナオサラ文「AはC BはナオサラC」の違いは、〈要素であるABCの中でどの部分が言いたいことであるか〉にある。マシテ文とナオサラ文が、〈要素であるABCの中でどの部分が言いたいことであるかが異なる〉ものであるとすると、マシテやナオサラの働きは、それらを含む一文のみで捉えられるのではなく、〈言いたいことが後続文脈にどう繋がっていくか〉といった、前後の文脈を含む文章・談話において捉えるべきものだと言うことになる\*<sup>3</sup>。マシテはとりたて副詞に分類されることがある\*<sup>4</sup>が、他のとりたて副詞も含め、文章・談話においてどのような働きを有するのかについては今後の課題となる。

#### 【注】

- \* 1 例文は取り上げる表現形式を片仮名にかえ、必要に応じて下線等を削除、または付加している。
- \* 2 ナオサラにおけるAとBとの関係について、森田 1989では、「[まして/いわんや]は、Aを前提としてBを引き出す役割を果たすのに対し、「なおさら」はA・Bの状態を比較して、Bの状態を「より以上」と形容する状態形容の語となる。」(p. 1060)、「(ナオサラは)ある状況に他の状況が加わることにより、その状態の程度がより高くなることを表す。」(p. 1059)、「[なおさら]は、新たな状況の累加を条件としている。」(p. 1060)と述べる。これは「累加」と同様の指摘にも思われるが、森田 1989では「共通項C」の指摘がないため、本稿で述べる

「累加」とは異なる可能性がある。なお、マシテについては、森田 1989では「ある一般的な状況の上に、さらにより厳しい状況が加算されることにより、状態が当然そうなることを強調する。」(p. 1058)と述べる一方、ナオサラとの比較においては「A・Bが異なる二つの状況において、“Aが……だから、Bはもちろん”の意味で」(pp. 1059-1060)と述べており、「累加」と捉えているのか「対比」と捉えているのか、またその両方であるとするのか、定かではない。

- \* 3 マシテは一般に副詞とされることが多いが、市川 1976では、接続詞との共通性も指摘されている。本稿は、マシテの品詞の確定を目的とするものではないが、文章・談話との関係という観点からは、この指摘は注目されるものである。
- \* 4 工藤 1977では、「文中の特定の対象を、同じ範列に属する他の語とどのような関係にあるかを示しつつ、範列語群の中からとりたてる機能をもつ副詞」を「限定副詞」とし、その一つとして「類推」を立ててイワンヤ・マシテをそれに分類する。工藤 1977の「限定副詞」は、工藤 1982で「とりたて副詞」に改称され、工藤 2000でも「とりたて副詞」の名称が用いられている。

#### 【用例出典】

用例は、『CD-ROM版新潮文庫の百冊』(新潮社)及び『CD-毎日新聞 2009』から採集したものである。『CD-ROM版新潮文庫の百冊』については、以下に作品名及び著者名を挙げる。

「国盗り」=司馬遼太郎『国盗り物語』、「新源氏」=田辺聖子『新源氏物語』、「鼻」=芥川龍之介『鼻』、「華岡」=有吉佐和子『華岡青洲の妻』、「冬」=梶井基次郎『冬の蠅』

#### 【引用文献】

- 安部朋世 2008 「副詞マシテの用法と意味」『千葉大学教育学部研究紀要』56, pp. 287-292
- 市川孝 1976 「副用語」『岩波講座 日本語 6 文法 I』岩波書店, pp. 219-258
- 工藤浩 1977 「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院, pp. 969-986
- 工藤浩 1982 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所報告71 研究報告集3』国立国語研究所, pp. 45-92
- 工藤浩 2000 「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店, pp. 163-234
- グループ・ジャマシイ 1998 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 飛田良文・浅田秀子 1994 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 森田良行 1989 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森田良行 2002 『日本語文法の発想』ひつじ書房